
生きたい少女と死ねない少年。

衣恋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生きたい少女と死ねない少年。

【Nコード】

N7597P

【作者名】

衣恋

【あらすじ】

生きたくても生きることができない少女と、死にたくても死ぬことのできない少年のお話。

生と死。

その2つはけして交わることはしない存在^{もの}。

人は、どちらの運命の方が幸せなのでしょう。

（前書き）

生きたくても生きることができない少女と、死にたくても死ぬことのできない少年のお話。

生と死。

その2つはけして交わることはしない存在^{もの}。

人は、どちらの運命の方が幸せなのでしょう。

「あー」

「死にたい。」

雲1つない、真っ青な空。

少女は、屋上の手すりの外、コンクリートでできた段差に腰掛け、足をブラブラと空中へ放り出していた。

紺色のセーラー服にまだ幼げな顔立ち。

一見すると普通の女子中学生に見えるその少女だが、ただ1つ違和感を感じるのは、少女の持つ銀色のナイフだった。

日差しに反射してキラリと光るそれを、少女は躊躇いもなく自分の胸へと突き立てた。

ナイフは、少女の体に突き刺さる寸前にぴたりと止まり、カランカランと乾いた音を立てて少女の隣に転がった。

少女はふいに顔を上げると、遠くに見える火葬場の煙を見つめた。

ただただ無言で、煙を見つめた。

どれ程の時間がたっただろうか。

誰とでもなくそんなことを呟こうとしていた時。

少女の頭上から、聞き慣れない声が降ってきた。

「死にたい、なんて、物騒なこと言うんだね。」

その声は、ひょいと柵を越えると、少女の隣に座った。

「・・・誰？」

当たり前とも言える少女のその質問に、その少年は笑顔で答えた。

「俺？俺は自分の名前とかとくに忘れちゃった。」

怪訝に顔を歪める少女だが、少年はそれをものともせず今度は少女に質問した。

「あのさ、なんで「死にたい」なんて思うの？」

少年の問いに、少女は少し間を置いた後、口を開いた。

「・・・ねえ、あんたさ、もしも「死んでも死んでも同じ年齢同じ場所同じ状況で死ぬ奴が居る」って言われたら、信じる？」

突飛もないその言葉に、少年は微笑んだ。

「うん。信じるよ。・・・だって、俺も似たようなもんだからね。」

「え・・・？」

少女はぱつと少年の方を向いた。

少年は変わらず微笑んだままだった。

「じゃあ君は、「生きてても生きてても死ねない奴が居る」って言われたら信じる？」

「・・・そんなの、ありえな・・・」

「それがあり得ないんだよね。・・・実際、そんな奴が今此処に居るわけだし？それに、君という存在も居る。・・・どう、矛盾はないだろ？」

少女は言葉を無くし、俯いていた。

「うーん、なんか納得してないみたいだね。」

少年は苦笑すると、立ち上がった。

何をするのか、と少女が顔を上げると、ふっと風が頬を撫でた。

「え」

少女のその声と同時に、飛び降りた少年の姿は、徐々に小さく小さくなっていった。

数分後、少年は変わらない笑みを顔に貼り付けながら少女の隣へと座った。

「どう？これで納得してもらえ・・・」

「・・・羨ましい。羨ましいよ、あんたが。」

俯き加減の少女が、ぽつりとそう言った。

少年の顔から、笑顔が消える。

「・・・そうかな、俺は、君が羨ましいけど。だってさ・・・」

少女はキツと強く睨むと、少年を掴み、体を揺さぶった。

「・・・羨ましい！？何処がツ・・・、こんな人生の何処が羨ましいっていのよ！死んで、生きかえってもまた同じところで死んで！それ以上先に進めない！生きていられないっ・・・、生きたいのに！あたしはまだ、生きていたいのに・・・っ！」

そこまで言つと、少女はぼろぼろと涙を零した。

「・・・ごめん・・・。」

少年は優しく少女の頭を撫でた。

「ごめん。・・・俺、酷いこと言つた・・・。」

「・・・っ」

少女は少年の胸に顔を埋めると、しゃくりあげながらぽつりぽつりと言葉を紡いだ。

「いつからだつたか、覚えてない、けど・・・、いつも、14歳の誕生日の日、に・・・、

この屋上から、飛び降りて、・・・死ぬの。昔のこととか・・・、全然覚えてないんだけど・・・、自分がこうやって死ぬことだけ、は・・・、なんか・・・、ずっと、覚えてて・・・。」

少年は少女を抱きしめた。

「・・・！？」

「・・・あのさ、君、俺のこと羨ましいって言つただろ？・・・さつきも言つた通り、俺、死ねないんだよ。だから、母さんとか、友達とか、大切な人たちが死んでいくのを何回も見てきた。その度に俺、死のうとした。・・・でも、やっぱり死ねなくて・・・。・・・だから、君が羨ましい。大切な人を失わないんだから。」

「っでも、あの人達は、あたしの何回目か分かんないほどの親だよ？だから別に大切な訳じゃ・・・。」

「・・・でもさ、君にとってはどうでもいい存在でも、君の親にとって君は、いつだって大切な存在なんじゃないの？」

少女と少年の沈黙を破ったのは、少女の携帯電話だった。

「・・・出てみれば？」

少年にそう促され、少女はポケットから携帯を取り出し、ゆっくりと開いた。

「・・・っ」

ぼたり、と画面に雫が落ちる。

それは紛れもなく、少女が零したものだっただ。

「・・・読んでみて。」

少年がそう言うと、少女は小さな声でメールを読み上げた。

「『朝、突然家を飛び出していったので、パパもママもとても心配しています。何か悩み事があるなら、いつでも相談してください。』

14年前の今日、あなたが生まれた。あの日から、パパとママの気持ちは変わりません。いつまでも元気でいて下さい。あなたはパパとママの大切な娘。』・・・っ」

少女の瞳からは、涙が溢れ出した。

拭っても拭っても涙は止まらず、少女の内側に溜まっていた沢山の感情を流しているようだった。

「・・・っでも、もう遅いよ・・・。あたし、もう・・・」

泣きじゃくる少女に、少年は言った。

「・・・君が死んでしまうのはいつ頃だか分かる？」

「・・・きよ、う・・・、夕日が沈む、瞬間・・・」

少年は空を見た。

真っ赤に染まる夕焼けは、もうほとんど沈んでいた。

「・・・っや」

少女が小さく声を出した。

「やだ・・・死にたくないよ・・・っまだ、死にたくない・・・！」

「・・・大丈夫。」

「・・・え？」

屋上に伸びた2つの黒い影法師。
そそ影が一瞬だけ重なった瞬間、夕日は沈んだ。

「・・・さよなら。」

「あら、今日は早いね。」

紺色のセーラー服にまだ幼げな顔立ちのその少女は、笑顔で振り返った。

「うん、ちよつと用事があるの。」

少女はクツを履くと、元気に外へと飛び出した。

「行ってきますー！パパ、ママ！」

あたしは屋上へと駆け上がると、勢いよく扉を開けた。

朝のヒンヤリとした空気が身を凜とさせてくれる。

柵を飛び越えると、何回この景色を見ただろう、昨日と変わらない景色がそこには広がっていた。

あたしは持ってきてきた花束のリボンを外し、雲1つ無い、真っ青な空に投げた。

色とりどりの花が、空を舞う。

「・・・ありがとう。」

少女は身を翻すと、屋上を後にした。

（後書き）

ささつと書いたものを初投稿です！
大雑把で、至らない点がありますが、お暇でしたらまた覗いてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7597p/>

生きたい少女と死ねない少年。

2010年12月31日05時28分発行